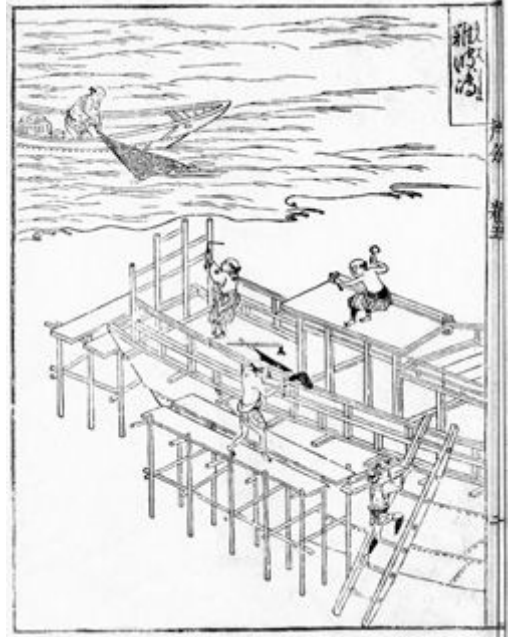


江戸初期の名所案内書である「芦分船(あしわけぶね)」によれば、「(難波島は)難波につづきたる所也。昔日難波の住人ひらきし所なれば此島の名とするにや」とあり、挿絵として船造りの風景を載せています。その後、元禄12年(1699年)に木津川の流路を一直線にするため河村瑞賢(かわむらざいけん)により島の中央部が開削され難波島は東西に分れ、東側を「月正島(がっしょうじま)」(浪速区)と呼び、西側を「難波島(なんばじま)」と言うようになりました。「摂津名所図会大成(せつつめいしよずえたいせい)」には「此地船大工職多く常に海船を作事す」とあります。木津川交通の要衝として発展し、当地にはかが加賀(現石川県)国等の船宿が見られ、北前船(きたまえぶね)が着船し、二十石積の上荷船(うわにぶね)が86艘あったとされます。



『大正区ホームページ』から転載

難波島の西側の三軒家川は一部埋め立てられ、百済橋(くだらばし)は廃橋になりましたが、橋の一部は隣に残されています。大正中期には造船所15社が集中し、現在も工場群となっています。島の南端には「木津川防潮水門」と「三軒家水門」があり、防災拠点となっています。

